
神様の涙

雪村亜輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様の涙

【Nコード】

N3255Z

【作者名】

雪村亜輝

【あらすじ】

目が覚めると突然白い世界にいたひとりの女子高生。

彼女は神の後継者として、この世界に召還されたのだと聞かされる。状況を理解出来ない彼女に、まずこの世界をよく知るべきだと地上に落とされてしまう。

そこは戦争があり、魔物などが徘徊してあまり安全な世界ではなかったが、神様候補である彼女には、誰も危害を加えることは出来なかった。

不定期更新になります。

白い世界

白い世界。

それは一面の雪景色のように見える。

けれど本当の雪景色ならば、真っ白な中にもその中に眠る土の息吹や、寒さに耐えて活動を続ける生き物の気配を何処かに感じるものだ。それに反してこの真っ白な世界には、何ひとつ命の息吹を感じない。

ただ白く、そしてそこに在るだけのもの。

四面をしみひとつない白い壁に囲まれた部屋が、一番この世界に近い状況かもしれない。

こんなに白く染め抜かれてしまうと、まるで真逆の闇の中にいるように感じてしまう。

自分の存在が見えなくなる。消えていく。

手足を動かしてみてもようやくそこに存在する肉体があることを思い出す。そして自分という存在も思い出せるのだ。こんな状態が長く続けば、気が狂ってしまうかもしれない。

そんな場所にただひとりで佇んでいた少女は声を出すことを思い出したように、朝起きたばかりのような喉の渴きを覚えながら、小さく呟いてみる。

「……誰か、いませんか」

壁に囲まれた部屋ならば、その空間の大きさを測ることが出来るだろう。

けれどそれすら存在しない世界では、どのくらいの声を出したらよいのかわからずに、小さな声でただその言葉を繰り返す。

ほっそりとした体軀はまだ少女が女性として成長する途中であることを思わせた。白に浮かび上がる、長い黒髪。世界を埋め尽くす白が彼女を飲み込むことが出来ないのは、その艶やかな黒髪のせいかもしれない。

少し気の強そうな茶色の瞳は、今は不安げにしきりに左右を見渡している。

「……どうして私、こんな所に……」

本来自分が存在するべき場所から遠く離され、理不尽な環境に置かれているという意識があった。誰かの意志が、彼女をここに連れ去ったのだ。本来普遍であるはずの日常を簡単に塗り替えてしまうほどの力の持ち主が。

白い部屋に立ち尽くす少女の胸に次第に沸き起こってきたのは、不安でも恐怖でもなく、ただこの理不尽な環境を作り出した人物に対する怒りだった。

「私をどうしようっていうの？」

不安げな色を宿していた茶色の双眸は、ようやく本来の色を取り戻したかのように光り輝く。怒りの中でさえ隠しきれない、少女の瑞々しい生命力が迸っていた。

「そう声を荒げるな。危害を加えるつもりはない」

ふと白い空間に人の姿が浮かび上がった。

白がそのまま人の形を為したかのように、真白い肌。それはあまりにも白すぎて、人間が持つ温もりをまったく感じさせない。こちらを真つ直ぐに見つめる瞳は、雄大な海を思わせる深い色を湛えていた。

「お前を呼んだのは私だ」

その声は若い男性の形をものだった。けれど柔らかく笑みを浮かべたその容姿は男性とは思えぬほど美しい。長い金色の髪が彼の動きに合わせてふわりと揺れる。

「わ、私を元の場所に帰して。家に帰りたいの」

その美しい姿に視線を奪われながらも、少女は毅然と顔を上げて告げた。どんなに美しくても相手は誘拐犯なのだ。

「残念ながらそれは無理だ」

青年は微笑みながらも少女の願いをあっさりと却下する。

「帰るにしてもお前は、自分の名前を覚えているか？ 何処に家が

あるのか知っているのか？」

「そんなの当然……」

知っているに決まっている。そう言い返そうとした少女の瞳が、不意に曇る。

「私は……、私の名前は……」

白い世界が、名前も住んでいた場所もすべて真っ白にしてしまった。そんな考えが頭の中に浮かび、唇を噛み締める。

「私に何をしたのよ……」

気の強そうな瞳からじんわりと涙が浮かぶ。慌てて頬を拭って視線を反らす彼女の頭を、美しい青年は撫でる。泣いてしまった幼子を慰めるような、優しい手つきだった。

「そう嘆くな。お前は選ばれたのだ」

「……選ばれたって、何に？」

何もわからない心細い空間で不意に与えられた優しさに、少女の反発心はみるみる影を潜めた。心細さを隠そうともせずに見上げてくる彼女に、青年は再び微笑む。

「私の後継者として選ばれた。お前は私の代わりにこの世界の神となり、この地に生きる幾多の命を見守らなくてはならない」

「……え？」

理解出来ないことがあまりにも多すぎたのだろう。彼女は首を傾げたまま、時間を止めてしまったかのように動かない。青年は苦笑し、彼女の肩を軽く叩く。

「突然のことで理解が追いつかないのは仕方がない。しばらくこの世界を見てくるといい。お前はこの世界の神になるのだから、何者もお前に危害を加えることは出来ない。色々な場所を見て、これから長い間見守ることになる世界を、ゆっくりと理解するのだ」

その言葉と共に、不意に世界が色を取り戻す。

すべての色が鮮やかに視界を回り、少女は瞳を閉じた。色の洪水に、目が回る。そのうち、背中に固い感触がした。そっと瞳を開くと、光り輝く太陽が真上に燦然と輝いていて、視界を奪われる。

「眩しい……」

けれどそれは生の息吹を感じさせる暖かな光。やっとあの白い空
間から抜け出せたことを知り、少女は安堵の溜息を付く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3255z/>

神様の涙

2011年12月11日09時45分発行